調査報告

ジェンダー平等意識・セクシュアリティ形成に関する世代別調査報告

橋本　紀子

１．はじめに

本稿は、平成 25 年度～27 年度日本学術振興会科学研究費補助金　基盤（B）「＜性＞に関する教育の内容構成・教育課程とジェンダー平等意識・セクシュアリティ形成」（研究代表者　橋本紀子、課題番号 2528521）の一環として進められている世代別インタビュー調査の中間報告である。これと同種の世代別調査は前回科研（『子どものジェンダー平等意識形成と学校に関する総合的研究～戦後男女共学制の総括』（2009-2011 年度、基盤 B、研究代表者：橋本紀子）でも実施され、その結果は、教育学研究室紀要 10 号に研究ノート「男女共学制が戦後の日本人のジェンダー平等意識に与えた影響に関する調査研究」として掲載した。本報告は、3 月末までに行われた「ジェンダー平等意識・セクシュアリティ形成に関する世代別インタビュー調査」のデータに基づいている。この間のインタビュー調査に従事したのは、橋本紀子、森岡真梨、関口久志、田中和江、茂木輝順、井上恵美子、田代美江子であるが、全体的な討議と考察はこれからであり、本報告の文責は橋本にある。

研究目的：今回の世代別インタビュー調査の研究目的は、戦後の男女共学制がジェンダー平等意識とセクシュアリティの形成にどのような影響を与えたかという点にある。したがって、セクシュアリティ形成に関する質問項目も加えての調査となる。

先行研究：先行研究として、セクシュアリティ形成の世代別変遷を明らかにしたエリナ・ハーヴィオ・マンニラ他著、『20 世紀の性的ライフスタイルに関する研究』（邦訳名、橋本・田代他訳『フィンランドにおける性的ライフスタイルの変容－3 世代 200 の自分史による質的研究』大月書店、2006 年）があげられる。その本でマンニラ等は、フィンランドの人々の性的ライフスタイルに関する自叙伝を 200 ほど集めて分析している。分析の結果、世代間の性に関する態度や行動、その意味づけの違いを、それを変容させる大きな歴史的変化という文脈で位置づけ、3 世代モデル、すなわち性的抑制の世代（1917-36 年の間に出生、第一世代）、性革命の世代（1937-56 年の間に出生、第二世代）、ジェンダー平等の世代（1957-73 年の間に出生、第三世代）を導き出している。さらに、子ども期、青年期、中年期、老年期というような個人のセクシュアル・ライフコースにも注目する。そして、自叙伝から 5 つの性的関係の型が導き出され、もう一つの重要な分析軸になっている。その類型は、一夫一婦、連続的な関係、探索状態、惰性的結合、並行的な関係である。

各人の性的ライフスタイルを公募するというような方法は、日本では適用できないが、その問題意識や分析視角等に学ぶことの多い作品である。

ここから、日本でも、インタビューガイドに基づいたインタビュー調査によれば、ジェンダー平等意識やセクシュアリティ形成上の要因となった事項の世代ごとの違いが見出せるのではないかと筆者等は考え、セクシュアリティ項目を加えてのインタビュー調査を実施することにした。

しかし、セクシュアリティ項目に関しては、日本の性文化の実情から、極めて、大まかな聞き方しか出来ていない。例えば、どのよう

な性教育を学校で受けたか、性情報の入手方法、高校時代に考えていた婚前交渉の是非、離婚に対するハードル､性的少数者への理解、家族イメージ等である。さらに、高校時代に描いていた進路、ライフコースを付加している。世代によって異なるヒヤリング項目は、性的少数者への理解についてである。

研究方法：上述の研究ノートでも述べたように、予備調査で、性別教科であった家庭科や体育における教育課程上の変更が、予想外に人々のジェンダー観や、実際の家事関連のスキル修得に影響を与えていた。ここから、研究方法として、学習指導要領の変遷と生まれた年度を対応させた世代分け区分（教育学研究室紀要 10 号 P. 29 の表）にもとづいて、1 年生から国民学校ではなく、新制小学校に入学し、戦前の教育制度は経験していない第一世代（1940～1946 年度生）から、中学・高校の性別教科が消えた後の第 5 世代（1978～1986 年度生）別に、個別あるいは座談会方式による集団インタビュー調査を行い、データを収集するという方法を今回も採用した。
また、前回科研の世代別調査の成果を日本教育学会第 71 回大会（2012 年 8 月）で発表した際の研究方法への助言を生かし、世代分け区分の指標の精緻化と世代ごとのインタビューガイドの作成が試みられ、調査対象者の選定方法も普通科、総合学科、専門学科（職業）高校を含むことや、性別、地域差等にも配慮して進められている。

さらに、分析視角として、幾度となく改訂された学習指導要領とそれに規制されて変遷した教育課程・教育内容、教科書と世代ごとの特徴がどのように、リンクしているのかをとりあげ検討する。解析方法の最終決定はこれからであるが、分析の際には現在の職業や価値観も考慮する必要がある。

今、戦後の男女共学制は日本人の性規範や性意識に、どのような影響を与えたのか否かという視点からの本格的な研究が求められていると思う。世代ごとの特徴を大まかにでも、見出すことができるなら、従軍慰安婦問題や性教育バッシングの背後にある日本人の性規範・性意識の特徴を不変的な部分と可変的な部分から検討することができるのではないかとも考えている。

作業課題としては、第一に、共学制発足直後の第 1 世代～第 5 世代へのインタビュー調査を各世代 10 名ずつ、計 50 名以上の対象者に行う。第二に、第 6 世代以降へは、平成 26 年度にインタビュー調査と同時に、高校生・大学生等への質問紙調査も行う予定である。

本研究は、従来、行われてこなかった男女共学制下のジェンダー平等意識・セクシュアリティ形成に関する世代別調査を質的、量的調査の両面から行おうとしている点に特徴があり、この研究結果を通じて、時代ごとの教育課程・教育内容の違いとそれぞれの世代の意識の違いとの関連が明らかになるのではないかと予想する。

２．世代別インタビュー調査の現段階（2014 年 3 月末）

これまで､調査した対象者の総計は 38 人であるが、その内訳は表 1 のようになる。

第一世代が 10 人、第二世代が 8 人、第三世代が 6 人、第四世代が 4 人、第五世代が 10 人で、男女比は、16：22 で、女子の方が若干多い。
第二世代の京都、岡山、栃木は東京で行われた集団ヒヤリングであり、また、第二世代の青森、広島、第三世代の岐阜、愛知、第四世代の大分も集団でのヒヤリングである。後者の集団ヒヤリングは、中部地方の一都市の勤労青年たちのグループへのヒヤリングだが、この世代はほとんどが高卒、女子で少し専門学校や短大卒者が出てくるが、四大卒がちらほら登場するのは、第四世代以降である。年度末に行われたこの中部地方でのヒヤリングのデータ 8 名分の整理は終わっていないので、

これを、除く、30名分のヒヤリングデータを
一覧したところでの、大まかな世代ごとの特徴や印象について、次に報告する。

世代別インタビュー調査　進捗状況

調査済み対象者（学校の種類別）

	総合高校		普通科高校		合計	出生年	高校所在地
	男性	女性	男性	女性	38		
G1	1	5	2	2	10	1940　～　1946	秋田・東京・新潟・山形
G2	2	1	4	1	8	1947　～　1956	北海道・青森・栃木・東京・神奈川・京都・岡山・広島
G3	0	3	1	2	6	1957　～　1965	愛知・岐阜・福岡
G4	0	3	0	1	4	1966　～　1977	群馬・大分
G5	0	1	6	3	10	1978　～　1986	埼玉・長野・香川

調査済み対象者（対象者の所属学科別）

	普通科以外		普通科		合計	出生年	高校所在地
	男性	女性	男性	女性	38		
G1			3	7	10	1940　～　1946	秋田・東京・新潟・山形
G2			6	2	8	1947　～　1956	北海道・青森・栃木・東京・神奈川・京都・岡山・広島
G3		2	1	3	6	1957　～　1965	愛知・岐阜・福岡
G4		1		3	4	1966　～　1977	群馬・大分
G5		1	6	3	10	1978　～　1986	埼玉・長野・香川

３．世代別調査終了者のデータを通覧しての
　　大まかな印象

第一世代

カリキュラムなど、第一世代共通部分もあるが、セクシュアリティや家族観に関しては、地域特性と学校種、性別による違いが出ている。

特に、質問項目３．性教育・性情報・婚前性交・離婚・家族のあり方と、４．進路・ライフコースについての考えの部分で、同一世代間でも違いが顕著である。

・性教育については、中学は「保健体育」で、高校は「体育」で保健はなかった。人体の構造とか生理のことなどは中学校でやったが高校ではやっていないというのが多数の意見だ

った。中には、中学校でもやった記憶がないという人や高校の生物の授業で人間の生殖については学んだという意見もある。
・性情報は、ませた友人が目にした雑誌等からの情報が主だったという山形男子、友人が買ってきた明星や平凡という雑誌や友人からの情報という新潟男子、映画を中学からみていたという東京男子、小説からという東京女子がいる。女子は友人とは話していない（男女間に違いがみられる）。
・婚前性交なんて話題にもならなかった（まわりにそういう人はいなかった）という東京男子、女子。人目があるから、つきあったりするのは、隠れてやったり、抑制されていたが、高校生は受験以外のことは考えていない。まず、受かってからだという山形男子。
新潟男子は、付き合っていて妊娠させてしまった高校生の情報を友人から聞いたが、その後はわからない。また、小学校の頃、母の職場に出入りすると、大人たちが、大っぴらにどこそこの誰は夜になると誰と外に出かけるとか、そういう話をしていたのを思い出して、婚前性交がいけないとかという規範は、当時、その地域ではあまり問題にされていなかったように思うという。
・結婚については、多くが、添い遂げるとかは意識していなかったけれども、離婚とか出戻りというのはなんとなく、伏せておくもので、世間体が悪いことと捉えられていた。しかし、理由があれば、離婚もあり得ると思っていたという意見も聞かれた。
また、半分以上が見合い結婚だったが、「見合い恋愛」がはやった時代（東京）。
まだ、男性でも高卒で県庁や市役所で働いている時代だから、女性は短大でも、見合いの条件としては学歴過剰で不利だったという意見（秋田）がある。
・家族のあり方については、誰かが家を継ぐものだと考えられていた時代（山形）という意見や、三世代家族が周り中にいて、子育ては祖父母が行い、親世代は男女とも働きに行く、家にいて子どもだけを見ているのはもったいないという、県庁所在地とは違う体験をしたという意見（秋田）がある一方、東京だと各地からやってきて住みつき、親世代がモボ・モガ世代だから三世代家族なんてとんでもないという感じだったという意見もあり、地域差が明確に表れた。

また、性別役割分業については、山形男子は女性が家事育児をするのは当然だと当時は思っていたといい、秋田の女子２人も縁があったら結婚して、仕事はやめるものと考えていたという。新潟の男女は女性が働くことは肯定している（母親が教師）。東京女子の高校は女子系共学高校（前身が旧制高等女学校）であり、友人の多くが職業につき継続していたわけではないが、対象者らは働き続けることを選択している。対象者の母親が男尊女卑の社会で苦労してきた分、子どもには女の子でも働き続けてほしいと思って、そういう生き方を応援していたと言っている。

第二世代

第二世代は、高校の「家庭一般」が、女子には原則として必修とされた時代であり、インタビュー対象者等の高校時代にもカリキュラム上、家庭科と体育が性別教科として存在したという。しかし、授業時間外に課されることがあった、学校家庭クラブについては、言及がない。前の世代と違い、理系、文系に分かれて学ぶようになってきているが、それは、3年からであり、受験勉強優先度も学校によって、違いがある。それは、クラブ活動や生徒会活動などの活発さにも影響している。男子校、女子校、共学校、男女併学校の異性とのかかわりの点でも顕著な違いがみられる。

これらに、比べ、第一世代と同様に、結婚や離婚、婚前性交、家族のあり方などについては、対象者が都市部にいたのか、農村部にいたのか、核家族か3世代家族かの違い、親

の職業の違いなどによる差が大きいことが分かる。まだ、3 世代家族の暮らしが、多く見られた時代である。

・神奈川の男女併学高校の学校生活は、第一世代に近い部分があり、男女併学のせいで、悲惨な青春？であったと言わしめている。この点は、京都の私立男子校とも違っている。京都の男子校の場合には、体育祭が中高合同で行われたが、学校としての一体感を味わえる、非常に盛り上がる行事だったと、充実した同性だけの学校生活を回想している。

・教師は中高とも全員男子だったという同校では、男女のあり方等について学んだ記憶はない。この点は、神奈川の男子高校生の場合も同様だし、岡山の公立共学高校も家庭科の女性教員を除けば､全員､男子の教員だけで、家庭科もやっていないから、男女のあり方等について学んだ記憶はないという。これに対して、栃木の公立女子高校では、音楽、国語（現代文、古文とも)、日本史、世界史、家庭科は女性教員である。しかし、女性教員も自分の担当科目を良く調べてきて、滔々と授業をやっており、家庭科は調理実習が多かったということで、特に、男女の役割や平等について学んだ記憶はないという。

こうして、結果的に、原則として女子のみ必修となった「家庭一般」は、女子は家事・育児担当者であるという意識を刷り込む性別教科としての役割を果たしていたことになる。また、岡山の旧制中学校と高等女学校が合体してできた共学高校で、クラスの男女比が５：４程度であっても、教員は、当時、圧倒的に男性が多かったことが注目される。

・対象者の学校のほとんどが、高 3 で理系、文系に分かれているが、私立の方が、文系でも数Ⅲまで選択できた｡また､岡山の場合は、受験勉強優先で、クラブ活動も抑制され、修学旅行も１泊２日に短縮され、生徒会も低調だったというが、京都の私立の場合には、クラブ活動も一生懸命やる、その他、いろいろなことを体験させるという箱庭的な教育でその違いは大きい。栃木の女子校は、クラブ活動も生徒会もそれなりに、活発にやられていたが、対象者自身が受験勉強のために、すべて、自己規制していたという。

・岡山の対象者から、当時は「三無主義の時代」と言われていたとの発言があったが、次第に高校生の生活世界が変化しはじめていたのだろう。ただ、市内 3 校の公立高校による３校戦で、大いに盛り上がったことを、冷たいレモネードと上級生の女子生徒の面影とともに記憶していた。共学体験者には、このように、なんらかの形で異性に対する感情や記憶が残っていることが推察される。この対象者は小学校では男女仲良しという感じの学校生活で、中学、高校も同じような感じで過ごしたが、小中時代に意識している子はいた。高校ではほのかな思いを持った経験を除いて、特別、意識していた異性がいたとか交際したとかはなかったという。京都の男子校では、異性と付き合っている人もいたが、対象者は全くそういうことはなかった。栃木の対象者は、付き合っている人はいなかったが、ペンフレンドはいて、恋愛の対象だったという。それを、糧に受験勉強をがんばって、大学に合格したと話している。

・一方、東京の男子系共学高校（前身が旧制中学校）は自由な雰囲気が漂い、教育の自由が認められていたユニークな教師たちが、独自の教材・教育方法で生徒の生きる姿勢や方向性に影響を与えている。特に女子には有用労働に就いて、経済的に自立する方向を示していたし、家庭科の教師からは、「家庭一般」女子のみ履修の問題性が問いかけられている。そのような教師の意識は浪人生への補習講座や卒講の教材にも反映していた。

・性教育については、中学校で初潮や生理の話を聞いたという栃木と、中１の理科の時間に受精の話を聞いたという岡山の対象者を除いた他の人は、学校でも家庭でも性教育を受

けた記憶はないという。また、岡山男子は、中学の理科の女性教員が妊娠していたが、大きなお腹をして、堂々と理科を教えていた。これが、何よりの生きた性教育だと思うと語っている。

・性情報については、神奈川男子は友人が持ってきたアダルト雑誌の回し読みや家庭にあったヌード写真や映画をあげ、岡山男子は雑誌などで知った友人の情報や近所のおばさんたちの噂話などをあげる。一方、東京女子は雑誌やテレビをあげ、友人とは話すものではないという雰囲気があったという（男女による文化・規範の違いがみられる）。栃木女子は高校生向けの雑誌や、週刊誌、ライトノベルなどをあげる。

・婚前性交について東京女子と京都男子は、当時、一般社会も本人も否定的だったと言っているが、離婚については、理由があれば、あり得ると思っていた（東京女子）や、子どもながら、いつ、親が離婚するか危機感を持っていた（京都男子）という。理由は、酒を飲めば暴力をふるう父親で、母親が実家に帰ることがあったから。岡山男子は、農村部では婚前性交など緩やかだったと思うと、当時の近所のおばさんたちの噂話を思い出して語ったが、同じ農村部でも、そういう話はあまり聞いたことがないと栃木女子は語り、性交したら結婚するものだと思っていたという。神奈川男子は高校生の時には、結婚や離婚なんて、全く意識してなかったという。

・家族については、東京、神奈川、北海道は核家族で育ち、東京女子は、専業主婦の母親がいばっていたが、いざとなると父親が中心の家族だったという。神奈川男子は母親も働いていたから、兄姉に育てられたといい、女性が働くのは普通の事ととらえていたという。これに対して、京都、岡山、栃木の対象者等は、3 世代家族で暮らしており、京都の場合には、父親には敬語を使っていたし、食べるものも子どもたちとは違って、父親中心の家族だったことや父母両方の祖父には“おめかけさん”がいたという。農家だったという栃木の場合には、父親と母親は比較的平等な関係だったが、父が亡くなった後、舅と共に農業労働をすることになった母親は、そうはいかなくて大変だった事が語られている。岡山の場合は、父親が会社を退職してから農家を継いでいて、母親も近郊農家として当時珍しかった野菜をいち早く、栽培して収益をあげ、対象者の学資に充てたというように才覚もあったから、家内で一定の発言権があったという。祖父と父は対象者に農業労働の手伝いをさせたことは無い。また、父と母は口論しても手はあげなかった。食事は基本、平等だが、美味しいものがあれば、長男である対象者がもらうということで、妹たちは、兄と差別されていたと感じていたらしい。長男の勉学を応援する都市近郊の「教育家族的」雰囲気があったようだ。

北海道の公立共学高校出身の対象者は、第 2 世代の最後の方に属するので、上記の最初の２人と 8 年の時代差がある。そこで、彼の話の特徴的な点を取り上げておく。彼の高校時代の記憶には、越境入学・高校紛争・制服の廃止・自由放任の授業・生徒会・部活の自治等が残っているという。

・1966 年度に北海道の公立高校入試制度が小学区制から大学区制に変更され、北海道中から大都市の高校に受験し、越境入学する生徒が増えた。こうして、最も学校間の学力格差が強く現れた 1970 年前後には、当時、まだ、男女間に学力差があったのでクラスの女子比率も下がった。対象者のクラスは 43 名中、女子 10 名ほどで、男子の 3 分の 1 にも満たなかった。対象者の学年の 2 つ下くらいで、あまりにも学力格差が激しいというので、中学区制に再度変更される。

・旧制中学が母体となっての共学ではあったが、1970 年代初めごろには、男子校のバンカラの伝統は残っていなかった。校歌も、戦後、

教師が作詞しており、堅忍不抜の言葉が入っていた程度で、校訓らしいものも特にない。北海道は仙台に置かれた第9軍団の指揮下に入っていたが、男女共学に関しては、東京などと同じようにスムーズに移行しており、東北、関東諸県とは異なる。これに関しては、北海道全体が、歴史がないから、こだわってもしょうがないというのがあるのではないか、家族制度も弱いですからと述べている。対象者もクラスメイトの女子に対し、あくまでも個人として見ていたという。

・対象者は、いわゆる高校紛争で荒れ放題になった校舎に、翌年入学した。その翌日かにあった上級生との対面式は、紛争の名残で、卵やトイレットペーパーなどいろいろなものが飛んでくる、バルサンはたかれるわというものだった。1年の時の卒業式は全学年が集まっているので、もっとひどく、校長の挨拶も聞こえず、ワーワー騒いでいる状態で終わったという。

・すべて、共学クラス。まだ、理系、文系と分かれておらず、理数系科目も、文系科目もほとんど全部履修する。その点では、第一世代に近い。体育と家庭科だけ男女別のカリキュラムだった。学校祭や球技大会などの全体の行事を仕切る場合に、リーダーシップをとるのは、男子で、補助するのが女子というようなところがあった。球技大会の時、女子は種目も少なく、早く終わるので、男子が試合をしているときに、レモンとかを切って来てわたしてくれるのはあったが、男女それぞれ、固まって行動するということもほとんどなく、性別をあまり、意識していなかった。フォークダンスは体育の授業とかでやったが、それで、ドキドキするなどというのは、中学くらいまでで、ほとんど、気にしていなかった。

・対象者は理系のクラブに所属したが、女子は少なかった。クラブは自由で、2つや3つ入っても良かったし、生真面目に練習しなければいけないというものでもなかった。修学旅行は京都、奈良。寝台列車と連絡船を乗り継いでいった。期間は短縮されて5泊ぐらいだったろうという。自由行動は京都で、性別関係なく、行きたい場所によって、グループを作って行動した。校舎外に出るのも自由で、喫茶店で休憩していても黙認された。単位が取れるか否かは、出席も含めて自己責任とされた。

・女性の教員は国語と英語、体育にいたが、圧倒的に男性教員が多かった。

・学校の中でカップルになったりする例はあった。対象者も高3で付き合っていた子がいた。他の学校の子と付き合っているというのもいた。個人的に交際していた異性とは、日常的に直接会って話す以外に、文通もしていた。これは思考訓練になっていたという。また、クラスでは自主的に「交換ノート」が回覧されていた。級友の思想等を知る上で有意義だった。現代の中高生の携帯メールとの違いが顕著。

・高校の後半は制服がなくなっていたこともあり、市街地の喫茶店をたまり場にして、他の高校の男女関係なく集まって、社会問題とかについて議論したり、ジャズを聞いたりしてたむろしていた。授業をさぼって、目抜き通りでやっているデモを見に行ったりしたが、そこに教師がいるのを見つけたりした。そういう教師は少数派だったが、生徒もどの教師がどうなのかについてはわかっていた。生徒の自主性というより、放任だったと思う。

・性教育は高校では受けていない。性情報は受験雑誌の特集なんかに性のテーマが取り上げられていて、読んだ。また、『プレイボーイ』とか『平凡パンチ』などからも性情報を入手しているが、教室に置いていても何も言われなかったし、興味がある女子も見ていた。特に友人と狭い意味での性について、語ることはなかったが、人生みたいなところに関わる内容で、男子だけではなくて、交際していない女子とでも話すことがあった。

・婚前性交については、当時、対象者も含めて、一般的には、その線は超えないように押さえておこうというのが強かったと思う。しかし、同じ学年の中に既に、そういう関係になっているのはいた。未知の領域というか、女子生徒の雰囲気が以前とすごく変わって、最初ショックだった。
・高2か3年の時に、ＬＧＢＴであることをカミングアウトした友人がいて、実際、そういう人がいるということを経験した。自分は同性愛でないけれど、そういう人が存在すること自体についてはいいのではないかと思っていた。
・離婚については、当時も、今も、否定はしないけれど、当事者になったらしんどいので嫌だな、避けたいなと思う。ただ、自分の母親を見ていると、嫌なことも堪えながらやっているなというのが垣間見えたりしたので、専業主婦は大変だろうなと思っていた。見合い結婚というのは、親も自分もほとんど意識していなかった。あまり結婚をどうするかっていうのは考えていなかった。
・親の転勤で高校在学中に一人住まいを始めたので核家族から一人暮らしになる。母方の実家は3世代の大家族で暮らしていたから、夏休みなんかに遊びにいくと面白かったと､3世代家族も疑似体験している。いろいろな才能に恵まれた母親がそれを発揮できないで、ひたすら、夫と子どものために、耐え忍ぶ姿を見てきた対象者は、女性も仕事をもつことに好意的であった。
・進路については、合格した地元の大学を振って、東京に出たいという気持ちを優先させて、自活しながら東京の大学に通うことになるが､その後､北海道と東京を往復しながら、大学、大学院と進む。院生時代に結婚し、子育てにも関わり、労働と家事・育児を夫婦で分担してきた。ジェンダー平等を家庭内でも実践してきている。

対象者の自由な発想と柔軟な生き方の背景には、いわゆる伝統やしがらみのない人たちで構成される北海道の社会が存在する。これが、世代を超えて、大きく影響していると思われる。

第三世代

この世代で、今、データ整理が終わっているのは､福岡県の公立共学高校出身者(女子)だけであり、この世代全体は、まだ、俯瞰できていない｡対象者の出生が 1957 年度であることから、むしろ、前述の北海道男子の時代に近い。したがって、あくまでも、その対象者に即した特徴的な点を報告するにとどまる。

１．基本情報

・出身校は、旧制高等女学校と商業学校を前身とする2校が合併した共学高校で、教員組合の先生が多く、成績順にクラス分けをするほど、ばりばりの進学高校だった市内の他の公立共学高校に較べ、同校は自由な雰囲気の学校だった。
・校舎は学年ごとに違ったが、男女一緒の校舎で、クラス編成は共学クラスのみで、１学年 10 クラスあり、1 クラス 40 数人で、男子が５～6 人多いという状況である。

２．学校生活について

・性別教科は、家庭科と体育である。家庭科は座学が多く、実習をやった記憶はあまりない。調理や被服は中学校でやったことは覚えているが、高校でやったという記憶はない。家庭科の教師についても覚えていないので、常勤でいたのかもわからない。男子はその時間何をしていたかなど、気にしていなかったが、男子は柔道か剣道が必修でどちらかを選択することになっていたから、体育として、多くやっていたのかもしれない。体育は男女別で行われ、教師も男女別にいた。女子は体育では、創作ダンスが必修で、得意でない人もいたから､班ごとに分かれて発表するのは、大変だった。その当時、女子も柔道、剣道を選択したいとか、選択できないのはおかしい

とかという考えは全くなかった。男女で種目が分かれるのは、当たり前だと思っていた。競技スポーツのほとんど男女別でやっていたが、水泳だけは同じプールでやっていた。理由は、学校にプールがなくて、25 メートル泳げる市営プールを借用していたからである。プールの真ん中で男女に分けて、男女別の先生がそれぞれ、指導していた。

・３年で文系、理系、専門学校・就職系に分かれた。２年までは家庭科、体育を除いて、共通カリキュラムで学び、３年で選択したコースによって、文系なら数Ⅱまで理系なら数Ⅲまでのように選択する科目ができた。文系なら化学と生物のどちらか、世界史、日本史のどちらかを選択するなどとなって、選択科目が増えた。夏休みには、学校で補習授業があった。

・男女のありかた、役割意識等について授業や授業外で、学ぶ場面があったかは、特に思い出せない。特別なことはやっていなかったと思う。

ただ、教員の態度で印象に残っていることとしては、１年時の担任教諭は女性で地理の教員だったが、最初の時間にイギリスの国歌を歌ったりして、堂々としていた。この出会いの意味は大きい。その姿に圧倒されると同時に、女性のロールモデルとして理想的に映った。一方で、世界史の男性教諭は、あまり、女性がでしゃばるのは、好ましくないというようなことを言っていた。組合員の多い学校であったが、ジェンダー平等に関しては多様な考えをもち、個性的な教員が集まっていたと思う。

・クラブは美術部に入っていた。学校行事では、クラス対抗競技会を市営の立派な競技場でやったことが印象的だ。それぞれ、出る種目は違うが、クラスごとに陣取って、競い合い盛り上がった。当時、競技会や生徒会などまだ、委員長は男子というイメージがあった。生徒会長は男子、書記は女子という時代で、それを自然に受け入れていた。フォークダンスはやったが、体育の時間でやった程度。

・市民会館で生徒総会をやったのが楽しかった。１学年 400 人以上いるので、3 学年合計すると 1000 人以上だから、全員を収容できる体育館がなかったので、市民会館でやった。制服の着用の仕方に関する身近なルールの見直し発言などがでたりして、楽しい盛り上がりを見せた。教師もほとんど、介入しないで、生徒の自主性にまかせていた。先生が午後出張となると、帰宅部の生徒は帰り、クラブに入っている生徒は、部活をするという自由さがあった。

・修学旅行は、行き先を生徒会で投票してみんなで決めた。奈良の飛鳥あたりを自転車でまわったが、まだ、道が整備されていなくて、ぼこぼこだし、途中雨が降ったりして大変だった。でも、自分たちで決めたので最後までやり通したことを覚えている。

・校旗や校訓については印象がないが、校歌には炭鉱の町らしく、「マンチェスター」という歌詞が入っていた。校訓に質実剛健的な文言はなかったように思う。

・異性への関心はなかったわけではないが、それは、先輩に対するあこがれとしてであって、同級生は友達以外のなにものでもなかった。対象者自身は、文通もしなかったし、男子と交際もしていなかった。いつも、仲良しの女子５～6 人と一緒に行動していたので、特に必要を感じなかったという。周りでは、誰かが先輩の誰かと付き合っているなどの噂はあったから、高校生でも、交際していた人はいただろうが、それほど、多くはない。

３．性に関する教育の事実と認識

・学校で「性教育」と思われる教育を受けたかについては、小学校のときもあったが、中学校の修学旅行前に、女子のみ月経指導があった。修学旅行の説明会のあと、女子はそこに残って説明を受け、男子は男性教員に連れられて、教室に戻っていたと思う。高校では、

性教育はやっていない。保健の授業があったかもしれないが、それ自体の記憶がない。
・性情報は、主に、ラジオの深夜放送から入手していた。「オールナイト日本」などがあった。テレビは家族と一緒に見るので、そういうものは見ないから。友人とも話したりしたが正確な性知識というような情報ではなく、“どうもこうらしいよ“という程度の話だった。学研などが生徒向けに出していた雑誌や家にあった『明星』や『平凡』などの雑誌からも情報は入手した。対象者の時代には、『セブンティーン』という雑誌が出ていた。ここにも性情報はあった。純文学の小説やハーレクイン社の女性向け大衆恋愛小説のようなものからいろいろな示唆を得た。スタンダールの『赤と黒』松本清張の『砂の器』なども読んだが、こういうところからも、情報を得ていた。漫画の『リリーとナナ』なども。
・未婚の青年の婚前性交も含む交際については、一般にも言われていたように思うが、対象者も結婚までは、特に女性は一線を越えてはいけないと思っていた。アイドルのコンサートに行ったり、異性と交際したりする暇はない、受験勉強を優先して、今は、我慢すると思っていた。
・当時は、結婚したら添い遂げるのが普通で、夫婦は子どものために、一緒にいるべきだと思っていたから、離婚なんて考えられなかった。周りでは、けんかして出て行ったりしても、離婚はしていなかった。少しの不調和は合わせるものと考えていたようだ。
・対象者の両親は共働きで、母は弟が生まれた時に離職した。中学2年までは、核家族で母親が頼りになる存在で、実権を握っていたように思う。父が長男だったから、祖父母と住むことになり、3世代家族になって、祖父は、母を気に入って、頼りにしていたが、母親が一番戸惑ったかもしれない。当時、この地域は兼業農家や小売店などの自営業、炭鉱関係の仕事の人などがいたが、核家族が多くなっていたと思う。対象者自身は核家族の方がいいと思っていた。
４．女性の進路について、どのようなライフコースを描いていたか。
大学に入って、自立し、就労するというのが大前提で、高校も選択した。仕事は、長く続けられる仕事を選ぼうとしていた。当時、女性は薬剤師や教師などか、あるいは公務員系の仕事を多く選んだ。進路選択も含め、自分は女性だからと、男性より一歩引いて、たとえば、男子が役所なら、女子は郵便局のような選択をすることがあったように思う。当時、女子は文系という気風はあったが、必ずしも成績の良い女子が理系を選んでいるわけでもなかったし、憧れているわけではなかった。ただ、理系を選ぶ女子は圧倒的に少なかった。文系対理系が４：３か５：２ぐらい。
出産退職なんてことは考えてもいなかったし、育児と就労の両立ができる仕事に就こうと思っていた。高校の仲良しの友だちが皆そう考えていたわけではない。私は父親の仕事が安定職で、継続して働ける環境なので、そう思っていたのだと思う。
質問項目の３、４に関して、この対象者は、世代の違いを超えて、親の職業や生き方、周りの人々の生きざまに、強く影響を受けていたことが示されている。

第四世代
現在、データ整理の終わっている群馬県の2校3人の対象者（公立普通科女子高校出身、69年度生1人、公立総合制高校出身、72年度生2人）について報告する。この時期は、中学校の技術と家庭科が相互乗り入れになっていたが、高校は、女子のみ「家庭一般」必修が多くの学校では、まだ、続いていた時代である。
前者は普通科のみの進学校であり、2年時に理系文系に分かれる。後者は対象者等が在籍していた当時は、商業科2クラスと普通科4

クラスがあった。半数は進学したが、4 年制大学に入学するのは 5, 6 人程度。対象者等は普通科で 2 年時に進学か、就職かで分かれ、3 年時に進学組の 1 クラスが理系クラスとなる。対象者 3 人のうち、総合制高校の 1 人は高校卒業後就職している。

・普通科女子高校出身者（以後、普通科女子と表記）は、家庭科はミシンや調理実習の記憶がないので、座学中心だったかもしれないと言っている。家庭科も含め、どの教科でも、ジェンダーや男女平等について学んだ記憶はない。また、中学時代は、生徒会長は男子しか立候補しなかったし、立候補は男子がするもの、女子は副会長だと思っていた。女子の方が活発で主導権を握っていたから、学級委員は女子も委員長をしていたかもしれないという。総合制高校では、家庭科でブラウスを作ったという。中学では足踏みミシンだったが、高校では電動ミシンだったことや、作品を母親に縫ってもらったこと、母親世代は洋服を作れる女の人が多かったなどが語られている。

・普通科女子は、体育は球技や陸上、水泳など 3 年間やったが、ちゃらんぽらんにやっていて、学年を追うごとに適当さが増したと言い、総合制女子は、水着が薄く、体育の教師が男性で嫌だったことを記憶していた。

・服装については、両校ともとの制服があり、それにまつわる話が出ている。パーマやピアスは禁止、化粧はしないのが普通という感じだった（普通科女子）。

・印象に残っている教師として、総合制女子の一人は、母子家庭の友人が、高校時代に付き合っていた若い男性教師について語った。１人でいることが多い、この女子高校生の家に上がり込んで、会っていたことを問題にし、卒業してからにすべきだと語っている。この後、出身校の卒業生と結婚した教師のことが話題になっている。普通科女子は、数学や古典の女性教員の教え方が良かったという点と、若い男の教員が赴任してくると好きになる生徒がいたり、部活の男性顧問が好きになるのもいたが、「告白したらしいよ」という噂が流れる程度だったということも述べている。

教師が高校の教え子と結婚したという例は、第一世代でもあったが、卒業してからというのがほとんどであった。このインタビューでは、在校中に教師と付き合うという例が語られているが、この時代に初めて出てきたことか、前からあったことなのかは、今の段階では分からない。ただ、普通科女子は、中学時代にある教師を好きになって高校入学後に告白したという女子生徒がその教師とデートしたという話や、対象者自身も、その先生に「お前が大人だったらお嫁さんにしたのにな」と言われたこと、また、中学で、それとは違う教師を好きだった生徒もいたが、付き合って子どもができて捨てられたという噂を聞いたと述べているので、当時、中学校段階から、女子生徒と男性教師との間の問題は顕在化していたと思われる。

・総合制の方の校歌には、良妻賢母などはなく、地元の自然がうたわれている。普通科高校の方も、良妻賢母ではなく、自立と大学受験という校風で、大学に行かなくても、短大・専門学校か公務員試験という雰囲気だった。

・男子学生との交流について普通科女子は、近隣の公立男子校との合コンがあり、学校を通しての交流はなかったが、友達の紹介で、複数で会うというのはあった。クラスでは付き合っている生徒はいたが、周りではそういう踏み込んだ話はしなかった。対象者のグループでは、付き合っている生徒はいなかったし、性的少数者の存在もわからない。２年のときに他校の文化祭に友人と行って男子に声を掛けられたが「どうする？どうする？」で、帰ってきてしまった。奥手だったのでどう対応したらいいのかわからなかったと語っている。

・性教育は、総合制の方は中学校で学んだこ

とを中心に記憶していた。養護教諭が学年全体を集めての一斉授業で「体の仕組み」を肯定的に教えたことや、保健室で個別に性行為による妊娠や性病のリスクについて聞いたこと。さらに、養護教諭の説明より、男の子がいろいろなことを教えたり、からかったりしたこと、また、男の子同士のふざけやからかいあいも記憶していた。高校の話は出ていない。

普通科女子も、さらっと、月経や男女の体の違いなどをやったが小中高どこで学んだかはわからないという。家族計画の重要性（子どもは計画的に）を習った記憶はあるが、具体的にどうするのかということは教わらなかった。教えられる以前に自分で知っていたという。

・性の情報源について、普通科女子は、小学６年生という雑誌を購読していたが､それに、子宮で子どもが育つなどの情報が漫画で載っていたため、学校での性教育は既に知っていることだったのであまり記憶に残っていない。林間学校にいく前日に初経があった。気づいてショックで大泣きしたため、家の前で待ち合わせしていた友人が知るところとなり、気まずくて、林間学校では、いつも仲良しの活発な女子のグループに入りに行けず、大人しい子たちのグループと遊んでいた。自分を見る目が違うと感じたのでそのほうが安心だった。対象者の母親が婦人科系の病気を抱えており月経が重かったので、月経=大人になる、大変、まだ嫌だ、ショックという負のイメージが強かったため、ショックで大泣きしたとのこと。

・若者の婚前性交について、総合制女子は、当時、そういうのはタブーで、誰もいわなかった気がする。高校時代、周りも誰もしていなかったし。結婚してからとは思っていなかったが、高校を卒業して働くようになってからだろうなと思っていたという。

普通科女子も、父親はわからないが、母親はだめだと思っていたはず。自分もそういうものだと思っていた。出来ちゃった結婚をした知り合いに対象者の母親は「女性が押しかけてきた」という言い方をしていたが、対象者は「でも手をだしたのは男性のほうだよね？だめだと本人が思うならしなければいいのに」と思っていた。対象者自身、中学生のとき男の子と交換日記を交わしていたことがあったが、何ら具体的な行動には発展しなかったにも関わらず、母親に早すぎると止められたことを回想している。

・離婚については、総合制女子は周りに離婚した人がいなかったし、あり得ないと思っていた。離婚したら世間体を気にする母親がかわいそうだって思う。世間の目を気にして、生きている人だから。あんまり、親が恥ずかしくないような生き方をしなくてはいけないなと、ずっと思っているという。もう一人の総合制女子も、自分の母親に離婚を考えたことはなかったかと聞いたら､実家に戻るより、ここで我慢した方がましだから、離婚は考えたことはないと答えたという。ここから、2人は、家庭内暴力とかなければ、性格の不一致ぐらいなら、我慢することもあり得るかなと話している。

普通科女子は、高校当時は添い遂げるものだと思っていた。好きになった人と結婚してずっと暮らすというのが普通だと思っていた。でも今は思っていない。結婚してみてそう思った。安易に結婚や離婚をしようとは思わないが、合わない人同士が一緒に住んでいても仕方がない。経済的な面で離婚できない人もいるんだろうなと思う。

今現在の話で、戸籍で夫婦＝妻としての役割を押し付けられるのが嫌だ。家事をして当たり前だと思われるのが嫌。同居するのはいいし、自分のことをするついでに夫の分もしておくのは構わないが、妻として夫に何々をしなければいけないというのが嫌だというのが今の気持ち。自分のことは自分でするのが基

本のシェアハウスのような生活がしたい。離婚もいいが、老後が不安。でも今のままの生活でも自分に全てが押し付けられるのは不安。子どもも夫も、家事を全部自分に任せてくるのがしんどいと語っている。

・家族のあり方については、3 人のうち 2 人は、父親が中心の核家族で、父親が来ないとごはんが出ない、母親が OK を出しても父親が駄目と言ったら駄目な家庭だったという。同じように働いて帰って来ても、母親だけが、家事は当たり前のようにこなしていた姿を見て、対象者の一人は、男女平等問題に関心を向けるようになったという

もう一人の方は、3 世代家族で、祖父が金銭面も管理して実権を握っていたから、嫁は単なる労働力としてみなされていたという。母親は農業労働の他に、近所の人の服の直しなどで、小遣い稼ぎをして、子どものものを買ってくれたりしていた。女は下に扱われていたから、兄はお刺身とか、お肉を食べていても、姉と対象者にはまわってこなかったし、祖父母は、旅行も兄だけ連れて行った。でも、それが当たり前だったから、別にいいやって思っていたという。

・進路について普通科女子は、校風などではなく、学力にあっていたからその高校を選んだという。高卒後の進路はジェンダーの圧力もなく自由に決めた。高校で、押し付けがましくされた記憶はない。対象者は、取りたい資格を考えて看護の専門学校へ進学。県外へ出る選択肢を考えていなかったので成績と得意科目で決めた。先生に相談も特にしていない。結局、県外に出ることになったので母親に泣かれた。

「手に職をつけろ」っていうのは母親の口癖だったので資格職をと思っていた。母親はそれで悔しい思いをしていたのだと思う。結婚すればいいやとは思っていなかった。高校卒業した春にバイトで同じことをする単純作業をして、作業自体は嫌いじゃないけれど私には向かないなと思った。色んなことができる仕事がいいなと思った。高校卒業して就職するなら公務員にならなくちゃいけないと思っていたし、短大や専門で資格を取らなきゃいけないなと思っていた。

その後、結婚し妊娠して仕事をやめた。職場の環境として妊娠しながら、子どもを育てながらでは無理だったので退職した。三つ子の魂百までと言うし子どもが小さい頃は一緒にいたかったので 3 年は家にいて、そのあとは働こうと思っていた。

看護学校の友人は両極端で、仕事を続けている人もいれば、結婚したら辞める／辞められる、過酷な職場から逃げたいという人もいる。自分は働きたかった、妊娠して専業主婦になったときに主婦をしている感覚はあったが、１週間で同じ生活の繰り返しに飽きてしまった。外に出たい、話がしたいと思ってしまった。経済的なこと（自由になるお金）もあって働き続けたいと思っている。

総合制女子の高卒後就職した人は、高卒後、すぐ、結婚して専業主婦になるつもりでいたという。祖父が女なんか、勉強なんかしなくていいという人だったから、姉も高卒で就職して国家公務員になった。姉はまだ、働き続けているが、私は小さい時から、女には女の役割があるとすり込まれてきたから。兄は当然、大学に行ったけど、みんなが進学する頃、いいな一進学できる子はって、思っていた。行けるなら行きたかったと思うと語っている。この対象者の母親も、その点で、祖父に逆らうこともなかった。所詮、他人なんだからって、「雇われ嫁」という感じで扱われていたから。祖母は家事を一切、やらない人だったから、祖父は家事、裁縫ができる嫁が来るって、喜んだらしい。条件付きで、親同士が決めた結婚だったという。

この点では、同じように「女に学はいらない」といって、娘の進学に反対だった父親を核家族だった方の母親は、説得して短大に進

学できるようにしている。この夫婦も親同士が勝手に決めた結婚だったという。ただ、農家の三世代家族と、父親が職人という核家族だった点が異なる。

現段階のデータによる第四世代は、群馬県という地域特性と家族構成、職業等による価値観の違いがより、明瞭に出ている。この時期には、高卒後、大学、専門学校等に進学する者の割合が一段と高まってきていることも背景にあり、女性の進路も多様化しているので、他地域のデータ等との比較が、今後の課題である。

第五世代

第五世代は、埼玉県公立普通科男子高校（1978年度生）4人、香川県公立普通科共学高校（1980年度生、女子３、男子２）5人、長野県私立総合制女子高校1人のデータに基づいて報告する。1989年の学習指導要領の改訂で、高校では1994年から家庭一般の選択必修が実施され、中学校では1993年から技術・家庭科の男女の区別がなくなった。この学習指導要領上の男女差別の解消の影響が、第五世代には、明らかにみられる。

・埼玉の対象者等が高校3年の時に、家庭一般を履修することになり、女性の教員が教えている。若い女の先生が家族関係について話していたことや、調理実習をやったことを覚えている。ただ、移行期のため2単位のみで、残りの2単位を選択科目の体育にしていたという。体育は男子校らしくラグビー、柔道、水泳などもやっているが、40キロハイクなどもあり、盛んだった。

それから、2年後出生の香川の場合は、家庭科も一緒で、体育も一緒だったことが語られている。野球やサッカーは選択する女子が少なくて、違う種目に集まったが、バレーボールも剣道、柔道もダンスも、男女一緒にやっている。中学の時には女子はブルマだったが、高校では男子と同じ短パンになった。また、長ジャージに半袖もあった。

剣道で男の子は女の子相手に打ちにくそうにしていたという。柔道の組手は男女別だったという声もあり。基本的に勉強ができていればいいという感じで、放任主義だった。名簿も、あいうえお順の男女混合で、家庭科の班を作るときも出席番号順だった。中学の時には男女別があったが、高校では全くなかったと語っている。水泳も男女混合でやっている。

長野の場合、対象者が実技系クラスだったことから、家庭科で調理実習が毎週あったが、体育は低調で、プールもなく、独立した体育祭のようなものもなかった。教員は女性が多かったという。

・クラス分けは、埼玉は、理系、文系という分け方ではなかったと言い、香川では、対象者等の年度は、3対2で理系が多かったという。また、文系理系を選ぶ時も男女で言われ方が違ったとかはなく、マークシートに希望を書くようになっていただけだった。男だから理系とかいう先生もいなかったし、男女の役割や平等について言われたことも、学んだこともないとの意見が多かったが、一人、男女混合名簿についての説明で「男女平等」だからと説明されたことを覚えていた。生徒会長など男子のコンビがやっていたなどと思い出すが、特にそれを問題視してはいない。やってくれる人がいればそれでいいという感じ。対象者等の多くが文化系クラブ所属で、部活もそれなりにやっているが、熱中したりはしていない。このメンバーは、文化祭も部活動対抗リレーなどの行事もあまり、熱心に参加していない様子。修学旅行も性別の班で自由行動の計画書は出したが、計画通りには動いていないし、付き合っている者同士で、デートしていることもあったという。

・埼玉の場合も、授業などで、男女のあり方とか男女平等とかの話は聞いた記憶はないと言っているが、学校公認の近隣の女子校との

交歓会には、みんな「おめかし」をしていたという。一方で、一度も行ったことがない人もいる。自由参加らしい。それ以外の学校の学園祭にも行っている。修学旅行は大阪、京都、広島、松山などをまわっているが、覚えていない人もいる。衝撃的な学校行事としては、いかつい先輩にしごかれて応援歌の練習をさせられたことや 40 キロハイクを挙げている。1 年で、臨海学校、2 年で修学旅行、3 年で受験となっていた。

・異性との交際に関して、香川は、友人で付き合っていた人やその場面をいろいろ思い出せるほどなので、多くはなくても、珍しい事でもない時代で、周りはそれほど、気にしていなかったという。ただ、性的関係を持っていたかどうかまでは、分からない。多くはなかったように思うと述べている。埼玉で彼女がいなかった人は、学校に普通にエロ本もあったし､エッチな話とかはしていたけど､悶々とした高校生活だったという。高 2 まで 1 年ぐらいは彼女がいたという人も、エッチはしていないと言っている｡同性愛者については、それらしい人は中学でも大学でもいたが、本当のところはわからないということで、高校も含めて、対象者等の視界には入っていなかった様子。

長野では、恋愛の話題は多く、他校の人と付き合ったり、合コンしたり、交際相手を紹介してもらう、電車で格好いい人に手紙を渡そうか悩むなどのようなことがあった。実際に交際していたのは､クラスでも 5−6 人の派手なグループの子だったが、クラスの半分以上は彼氏を欲しがっていたと思うと述べている。

・校訓については 3 校とも、質実剛健的なものは見られない。校歌については、埼玉は新制高校になった時に校歌を作り変えている。香川も、校歌は作り変えているが、校旗、校章には、旧制中学、高女時代の両者の影響が共に出ている。長野は授業で保守的な女性像が強調され、男の役割、女の役割は異なるという立場からの教育であった。しかし、生徒は怖い先生が見ていないところでは自由にしていたし、かなり下品で恥じらいゼロという生徒もいた。

・性教育に関して、体育で聞いたという人もいれば、数学の教師がいつも下ネタしていたことを記憶している人もいた。ペニスの断面図が載っている教科書しか思い出せないという人もいる一方で､｢マスターベーションをするときに意図せずに精液が出ることがあるように、コンドームをつけておかないと予期せぬ妊娠に見舞われる可能性が高い」という、教師の言葉を覚えていた人もいる。ここで、中学でも女子の方が保健室に連れていかれたりして、性教育を受けていたが、男子は世間話とか噂とかのレベルのこと以外、教育らしいものは受けていないと語っている。小学校の保健で、男女一緒に性教育を受けたのは印象的に覚えているという。1981 年度生まれ以降は、小学校でも保健の教科書があるようになり、性教育もきちんとやらなくてはいけないとなってきたから、1978 年生まれの対象者等の時代は、ぎりぎりやっていない時期に入る。ただ、先導的試行でやっているところもあったので、学校によって違う（埼玉)。保健の授業で、コンドームの実物がまわってきたことや、教科書に掲載の女性、男性の生殖器の断面図についても記憶していた。また、この図だけでは生理と射精の違いが分からないとか、精子はどうやって卵に出会うのかが疑問だった人もいて、友だち同士で教え合ったりしている。ＨＩＶについて集会で話を聞いたことも記憶していた（香川)。保健という授業はあったが、高校では性教育はなかったと思う。記憶にあるのは、小学校で女子だけ集めて月経教育をした他に、クラス全員が図説で性交について教えられたこと。小学校 4 年の時で衝撃的だったという。不潔―！みたいな感じで、ご飯が食べられなかった。中学校では、生徒がコンドームを持ってきて膨らま

せて遊んだりしていることはあったが、性教育の記憶はない（長野）。

・性情報は、『魔女の条件』などのドラマ（高校生が普通に恋愛したり、セックスしたりするという描写）や、漫画、経験済みの友人から（香川）というものや、『エルティーン』などの雑誌や女子用のセックス特集があるような雑誌の回し読みと友人から（長野）、また、アダルト雑誌、『ギルガメッシュナイ』などのテレビ番組、アダルトビデオなどがあげられる（埼玉）。アダルトビデオに関しては、自室にテレビを持っていた高校生以外は、中学時に友だちの家で見たことがある程度で、大学生になってから、自由に見られるようになっている。見ようとして親にばれて、気まずかったという人もいる。深夜番組もびくびくしながら見ていた。包茎に関する雑誌広告も気になっていたが、6、7割は仮性包茎だから、心配する必要がないというような性教育もなかった（埼玉）などが話されている。

・高校生の性文化

否定的な感想と共に、文化祭で露骨な性表現の仮装があったことや、生徒会の出していた冊子に“オナニーのやりかた”という記事があって、衝撃的だったことも回想している（黒いこんにゃくだとチクチクするから、白いこんにゃくを使えというようなことが書いてあった）。高校時代部活とオナニーでエネルギーを発散していたというのは、対象者等に共通のようだが、中には、部室でしたことがあるという人もいた（部室には紹興酒とエロ本があった）。また、中には、部活の関係で行き来していた近隣の女子校に休日に出かけて、上向きになる水道の蛇口にペニスをくっつけたか、おしっこをかけたかしたことがあったのを回想している（埼玉）。

・婚前性交についてどう思っていたか

当時の漫画などの影響もあって、対象者の女性たちは、お付き合いするっていうことには、性交も含まれているという風に受け止めていたが、多くは、高校生の性交は自粛すべきと考えている。1名は、成り行きで、そうなることもあり得ると捉えていたという（香川）。当時のドラマなども婚前性交について肯定的に描かれており、自由恋愛でいいという感じだったが、ただ、自分のことに関しては、親、特に母親は結婚するまでとは言わないけど、高校生のセックスは好ましくないと思っている気配を感じていたという。中には、女親はそうかもしれないが、オナニーの延長上だし、多分、自分ならしたいからするっていうので良いと考えていたという。しかし、現実には対象者等はみんな大学に行ってから性交を経験している（埼玉）。

雑誌や漫画などにあおられてかわからないが、大半の人が、早くセックスを体験したいと思っていたのではないか。経験者の中には自慢半分に言いふらすような人もいて、彼がいることがステイタスになっていた。男女交際は学校で禁止はされていなかった。セックスに対して、シリアスに考えていないし、してはいけないという感覚もなく、避妊もあまり考えていなかったと思う。親にはバレないだろうと思っていたが、親に隠すのは、「バレたら恥ずかしい、気まずい」からであって、怒られるから隠すというような感覚でもなかったという。クラスで臨まない妊娠をした級友に対しても、好奇の目が向けられるだけで、噂話として扱われ、善悪についてどうこう言うことはなかった（長野）。

・離婚について

多くの人が、高校生の時には、結婚したら添い遂げるものと思っていて、離婚なんて考えなかったというが、その後、離婚を経験した人もいれば、周りに離婚してシングルになっている人が結構いるという人もいて、離婚のハードルは低くなっている。親も含めて、世間体というより、個人の幸せに重点を置いている。ただ、高校生の時には、苗字が変わると好奇の目で見られたりして嫌だろうなとか、

子どもはかわいそうだとか思っていたという意見もある。

・家族について

対象者は核家族で自由な雰囲気で育ったので、地域は保守的で三世代家族を肯定する雰囲気が強いところだが、核家族に肯定的（長野）。途中から祖父母と暮らした人、途中から核家族になった人でも、いずれも父親が働いて、母親が専業主婦やパートという対象者等は、父親中心の家族であったという。しかし、家事・育児をほとんどやらなかった父親が退職後手伝うようになっている姿をとらえている（埼玉）。三世代家族で暮らしている自営業の家庭の人は、祖父、祖母が家長だったりしているが、母親も家業を手伝っているという中で、成長している。「手に職をつけろ」とは言われていたという。また、父親は夫の戦死後の時代を生き抜いてきた自分の母親（祖母）と共に、粛々と家を守り、お墓を守るという役目をこなしているという人も。他には企業戦士でほとんど家にいない父親と専業主婦の母親のところで育った人、核家族だが自営業で母親が経理等を担当しているという人もいる。父親がいないと経済上成り立たないという面を抜くと、家庭の運営では女性が中心になっている様子。特に、自分たちのこうありたい家族像は語られていない（香川）。

・高卒後の進路をどう考えていたか

香川の対象者全員が大学進学を考えていて、将来何かの仕事に就こうとは考えていた。しかし、高校時代、結婚については積極的にしようとは思わなかったや、最初から結婚するつもりがなかったという人もいる。実際は結婚組が 2 人。

長野の対象者は、付属の短大、地元就職、結婚、専業主婦というコースに面白味を感じなかったので、外部の短大に進学し、就職に一番有利かと思って、経済・ビジネスを学んだ。高校の友だちはみんな結婚しているが、大学の友だちは半々だ。今後、結婚や出産をするとしたら、仕事を続けたい。社会との接点を失いたくないことと、自由にできるお金が必要だから。「食わせてやっているとか言われるのは絶対いや」と言っている。公務員と結婚しろという安定志向の母親が反面教師になっているかもしれない。結婚した後の就労形態は、定時であがれて責任もないから、「派遣くらいがちょうどいい」とも思っているという。

４．おわりに

通覧したところ、学習指導要領の改訂に対応して、性別教科であった家庭科、体育はもちろんのこと、保健で扱う内容も含めて、各世代それぞれに共通の特徴がみられる。しかし、セクシュアリティや家族観、進路、ライフコースの設定の仕方などに関しては、世代による同一性を超えて、地域特性と学校種、育った家族類型、親の職業、性別による違いが出ている。

第一世代から第三世代までは、結婚や離婚、婚前性交、家族のあり方などについては、対象者が都市部にいたのか、農村部にいたのか、核家族か 3 世代家族かの違い、親の職業の違いなどによる差が大きいことが明らかになった。未婚の若者の婚前性交や離婚はまだ、世間体が悪いことで、伏せておくというような抑制が表向き効いていた時期のようである。ただし、そのような性規範には囚われない生活世界があったことをうかがわせる発言も出ていた。このような地域なり、階層なりに調査対象者を広げる必要がある。

第 4 世代になると、一層、婚前性交や離婚のハードルは低くなっている。また、高卒後、早々に専業主婦になった対象者が、「女に学はいらない」と言われ続け、自己肯定感を低下させられ、ジェンダー平等意識も形成できなかったことが伺われた。この事例は、生育歴と学歴も視野に入れて、分析する必要を示唆している。この世代の対象者は現在、群馬だけである。祖父か父かの違いはあるが対象者

の２人とも、「女に学はいらない」と言われているので、今後、他地域のデータとの比較が必要である。
第５世代は、学習指導要領上の男女差別の解消が教育内容に反映し、男女共通の教育経験を積むようになっている。それ以上に、テレビドラマ、漫画、アダルトビデオ等が流す性情報から影響を受けている。ただし、高校生段階ではまだ、自室でビデオを見られた者は少ない。
第６世代以降の携帯電話、スマホ世代では、このハードルも低くなっており、フィルタリングの必要など、別の課題が浮上してきている。
今後の調査の課題は、対象者の学校種を普通科以外に広げることと、高卒で就労した層への調査を進めることである。